

(兄：H8/6/21, 弟：H9/7/4), 術後経過は良好である。小児褐色細胞腫はまれであり, なかでも家族内発生は極めてまれである。本症例では他に合併病変を認めず, いわゆる Nonsyndromatic type と考えられるが, 遺伝性が強く窺われることから, 現在関連遺伝子を検索中である。

19) 小児慢性肉芽腫症の2例

—大腸内視鏡所見を中心に—

増子 洋・廣川慎一郎
新井 英樹・坂本 隆 (富山医科薬科大学)
塚田 一博 (第2外科)
松沢 純子・在田 友子
宮脇 利男 (同 小児科)
山下 芳朗 (藤木病院外科)

慢性肉芽腫症は生後半年以内に発症し, 重篤な感染症を繰り返す好中球機能異常症である。今回我々は2例の小児慢性肉芽腫症に対し大腸内視鏡を行う機会を得た。1例目は3カ月時に繰り返す感染症がきっかけで慢性肉芽腫症と診断された1才11カ月の男児例で, 頻回の下痢・粘血便と熱発のため当院小児科入院。大腸内視鏡検査では, 全結腸にわたって粘膜の浮腫と隆起性病変が認められ, 組織学的には類上皮細胞肉芽腫の形成が認められた。ステロイド, 食事療法にて症状は軽快し, 内視鏡検査でも改善が確認された。2例目は難治性の肺炎と肛門周囲膿瘍がきっかけで慢性肉芽腫症と診断された7カ月の男児例で, 特に消化器症状は認められなかったが, 消化管精査目的で大腸内視鏡を施行した。結腸内にはタコイボ状の小隆起が多発しており組織学的には炎症細胞の浸潤で慢性肉芽腫症の大腸における初期病変と考えられた。

20) 当科における最近5年間の新生児症例の検討

大滝 雅博・広田 雅行 (長岡赤十字病院)
小児外科

【目的】今回われわれは, 当科における最近5年間の新生児症例の検討をおこなったのでここに報告する。
【対象】92年1月より96年12月までに当科で経験した, NICU 入室者36人を対象とした。【結果】患者数の経時的変化は92年7人, 93年9人, 94年7人, 95年8人, 96年5人であった。36例中, 直腸肛門奇形が最多症例(6例, 16.7%)をしめた。NICU 入室者36人中, 全死亡者は4人(11.1%), うち1人(25%)が1000g未満の超未熟児であった。死亡症例4例は, いずれも重症合

併症, 先天奇形, あるいは低体重などの risk factor を有していた。

21) 1985年以降に当科で経験した Hirschsprung 病症例の検討

浜崎 安純・山際 岩雄
小幡 和也・島崎 靖久 (山形大学第二外科)

【目的】近年, 治療法の進歩に伴い Hirschsprung 病の生命予後はもちろん, 術後の QOL も向上している。今回, 自経験例を検討し報告する。

【対象】1985年以降に当科で経験した Hirschsprung 病の22症例を検討の対象とした。

【結果】22症例(男児17例, 女児5例)のうち, 16例には Duhamel-GIA 法を, 5例には Lynn 手術を施行した。根治手術は18日齢~13才(平均1才4ヶ月, median 6ヶ月)で施行した。術死はなかったが, 1例を根治術前に腸炎からの DIC, MOF で失った。術後早期合併症は Duhamel の1例に ileus, Lynn の1例に縫合不全を見た。術後の排便機能はいずれも良好であった。最近では新生児期に Endo-GIA を用いた Duhamel 法による一期的根治手術を試み, 良好な成績を得ている。

22) 鈍的外傷による気管挫滅の1例

藤田 康雄・土田 昌一 (秋田赤十字病院)
呼吸器外科

19歳, 男性で, 平成8年7月9日, 秋田新幹線工事中に, 倒れたコンクリート製の電柱の下敷きとなった。急性呼吸不全の状態で見舞の病院を経て当科へ搬送された。気管は約5cmに渡り, 膜様部を残して完全欠損しており, 周辺の残存気管も壁は脆く, 吻合はできなかった。気管切開, スパイラルチューブを気管分岐部直上で留置固定し, 周辺の胸膜を巻き付けて閉胸した。1ヶ月間, 自発呼吸を止めて, 人工呼吸器管理をおこなった。緑膿菌による肺炎と気管チューブ周囲感染を来したが, 気管支ファイバーによる頻回吸引で改善した。現在, 気管チューブ留置のまま, 経過観察中である。